

常議員会議長席から

縁あって、今度は議長として



常議員会議長 鈴木 利治 (26期)

副議長席から議長席に

私は平成14(2002)年、石渡光一常議員会議長の下で副議長を仰せつかった。それから5年、縁あって今度は常議員会議長席に着くこととなった。前回は副議長として、定足数の報告、議事録署名者の氏名の他は、無言の行にこれ努めたものであるが、今回は、議長として毎回議事進行に当たっている。

議長故の職責と役得

副議長との一番の違いは、議長として常議員会以外の場でも出番があるということである。

総会においては常議員会の審議経過の報告が求められることなどがそれである。総会での役割は常議員会議長として当然の職務である。しかし、その他にも、議長に割り当てられる職務がある。

例えば、運動会では万歳三唱の役を与えられた。また、先進会員慰労会では、未だ、先進会員の資格もないにもかかわらず、出席することとなり、しかも慣例により、乾杯の音頭を取ることもあった。

普通、この種の会合では、一番年長者が乾杯の音頭を取ることが多く「年長の故をもって、乾杯の音頭を取らせて頂きます」と前置きするのが通例である。

私は、「先進会員が多数お集まりの中で僭越ですが、役職の故をもって乾杯の音頭を取らせて頂きます」と前置きをして、乾杯の音頭を取らせて頂いたものである。

また今年の先進会員慰労会では、山田洋次監督の講演があり、内容は平成20(2008)年正月封切り予定の「母べえ」の制作の裏話や「寅さん」のお話であった。吉永小百合さん、渥美清さんのお話等誠に興味深いものであった。

本来なら出席資格がないにもかかわらず、山田洋次監督の話聞く機会が与えられたのは、議長故の一種の役得というものであろう。

また、乾杯の音頭の機会に、「母べえ」に出演する、歌舞伎の坂東三津五郎、元宝塚歌劇の檀れいの二人を引き合いに出して、私の大好きな、歌舞伎と宝塚等という、お話をすることができたのも、議長をお引き受けしたためであり、誠に有り難く感じた次第である。

常議員会の審議について

本年度は、弁護士補償事業の廃止など、かなり多様な意見がある議案もあったが、必要な時間熱心に討議して頂き、最後は、多数決により議案が決められ、常議員会としての役目を果たすことができたと考えている。

最後に、常議員会での現行60期の新入会員宣誓式が2回に分けて実施されたことを目の当たりにするとき、弁護士大増員時代が始まったことをひしひしと感じた。毎回の常議員会の議案も、弁護士増員と無関係ではない。残された任期も充実した審議のため議事進行に努める所存である。

常議員会副議長に就任して



常議員会副議長 篠原 焯夫 (34期)

常議員会とは

常議員会は、総会に次ぐ重要な意思決定機関である。

国政に例えれば、会長及び副会長の合議体（理事会）が内閣であり、常議員会が国会にあたるということになるのであろう。

常議員会は、80名の常議員で構成され、議長及び副議長1人を置くことになっている。

定足数は20名である。

定時の常議員会は、原則として毎月1回開催される。

副議長の役割

副議長の役割は、議長を補佐し、議長に事故あるときは、議長の職務を行なうことである。

私は、これまでに第5回常議員会（9月10日）で議長を代行した。

そのほか、副議長は、毎回、会議の冒頭で出席者の人数を報告し、定足数に達し、適法に常議員会が成立したことの宣言をし、議事録署名者2名を指名する役割を担っている。

議事進行

最初に執行部から議案が提出され、提案理由が述べられ、その後、質問 → 討論（意見） → 議決の順で議事が進行する。

議案によっては、関連委員会から審議経過の報告

がなされることもある。

常議員会が充実したものになるのか否かは、各常議員の活発な質疑・討論にあることは言うまでもない。そのためには、各常議員は事前に執行部から配布される分厚い資料を充分検討しておく必要がある。この資料の検討には、結構時間を要するものである。

感想

最後に、常議員会における私の個人的感想を箇条書きにすると以下のとおりである。

①いつも発言する人と、全く発言しない人がいる。

常議員会は、前述のとおり、総会に次ぐ重要な意思決定機関なのであるから、常議員一人一人の意見が極めて重要になる。したがって、遠慮せず、また、恥ずかしがらずにどんどん討論に加わって欲しいと感じた。

②副議長は、議長と壇上にいるため、質疑・討論に加わることはできない。できれば、私も議論に加わり、意見を述べたいといつも思っていた。不謹慎な言い方かもしれないが、長時間、何も喋らないで壇上で座っている副議長の職務も辛いものがある。

③以上のとおり、私は壇上で座っていただけであり、副議長としての職責を果たしていたのかどうか甚だ疑わしいところである。

ただ、毎回、鈴木利治議長の円熟した議事進行ぶりを横で感心しながら聞いていたにすぎない…。